

日帰りハイキング旅行における 観光者の感情変化についての一考察

A Study on Changes of Tourists' Feelings during a One-Day Hiking Experience

杉本 興運*

Koun Sugimoto

摘 要

本稿は、都市近郊の自然観光地を対象に、日帰りハイキング旅行者の感情変化の把握を試みた。秩父奥多摩甲斐国立公園のハイキングコースにおいて、大学生 14 人に対し、7 つの地点において直前の行動場面を踏まえた現時点での感情を 17 項目で評価してもらった。そして、項目間の共変動を考慮した階層的クラスタ分析から、4 つのクラスタを抽出し、それぞれの変動パターンを調べた。クラスタ 1 の感動・感興を表す感情は、登山によって徐々に上昇し、眺望景観のような見所となる観光対象への到達や登山自体の達成感によって頂点に達し、下山で徐々に下降した。やる気や期待のように、クラスタ 2 の観光者自身で内発する感情は、旅程初期から見所となる観光対象に出会うまで持続するが、その後に関心が薄れ下降した。クラスタ 3 の安らぎや混雑など、環境特性に大きく影響される感情は、不規則に変動した。消極的な感情の集まりであるクラスタ 4 は、疲労の蓄積にともない旅程終盤で表面化した。これらの結果から、行動場面ごとに支配的な感情は様々に異なること、各感情は独立して変動するのではなく相互に影響し合あうことが示唆された。観光コースの計画や整備には、観光者がもつ多様な感情とそれらの動態を考慮することが望ましい。

I. はじめに

1.1 ハイキングの行動研究

国立公園に代表される自然観光地は、自然保護と同時に観光レクリエーションの機会を提供する役割をもち、人々が非日常空間での心理的充足を得るための貴重な場となっている。そこでは様々な種類の行動が展開されるのだが、特に徒歩が中心となるハイキングは自然観光地における一般的な行動であるため¹⁾、ハイキング利用者の行動に関する研究は、観光地の望ましい管理・計画を実現するための基礎研究として数多く蓄積されてきた。例えば、質問紙を使った体験の質に関する調査 (Hull and Stewart 1995; Chhetri et al. 2004)、ビデオカメラを使用した来訪者の流動調査 (Schwartz et al. 2009)、GPS を使用した来訪者の移動や滞在などの行動動態調査 (Chhetri et al. 2010; Wolf et al. 2011)、使い切りカメラを使用した景観認識の調査 (Oku and Fukamachi 2006; Dowart and Moore 2009) など、多様である。しかし、感興や満足感などに代表されるような、

観光者の行動心理に関する基礎的な研究は、十分な蓄積があるとは言えない。

Chhetri et al. (2004) は、ハイキングによる満足感を規定する心理の構造を、オーストラリアの国立公園を訪れた大学生 25 人の自然景観に対する印象評価を基にして明らかにした。しかし、ハイキングにおける満足感の規定要因は自然景観だけではなく、他の性質をもった観光対象や、観光体験のシークエンスも関係する。Hull et al. (1992) はアメリカ合衆国の自然公園において、トレイル上の数か所の地点でハイキング利用者に現時点での感情状態の評価をさせ、ハイキングの過程における感情変化の特徴を探索した。しかし、環境特性が異なる観光地に適用した場合に、同様の傾向がみられるか否かは検証されていない。日本の東京のような大都市の近郊にある国立公園は、オーストラリアやアメリカ合衆国の一般的な自然公園とは環境特性が異なり、トレイルやその周辺地域が広大な自然景観で埋め尽くされているわけではなく、山道の間地点や山頂に神社や飲食店などの観光資源・施設が配置されている場合がある。また、場所によっては集落が形

*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9 号館)
e-mail: koun.sugimoto@gmail.co.jp

成されている。そうした地域を訪れる観光者は、山道での歩行や自然景観の鑑賞以外にも、様々な行動をするのが一般的である。観光者にとって観光体験中の評価対象はトレイル上の景観眺望という行為に限定されるわけではない。そのため、より複合的な環境要素を加味した評価の方法も検討される必要がある。観光地の多様な要素を利用者目線で、かつ観光体験のシーケンスの側面から評価することによって、自然観光地における観光ルート設計、ツアー計画におけるルート選択、推奨ルートの情報提供のための有益な知見を得られるだろう。よって、本研究で対象とする行動とは、ある地点からある地点への移動および特定空間内の行為などを包括したものとなる。

1.2 ハイキングと行動場面

ハイキングという名称で一元的に扱われがちな観光行動は、山道での登山や下山、展望台での鑑賞行為、飲食を伴う休息など、いくつかの部分的な行動の連続として捉えられる。そして、旅行中のある特定の部分的行動は決して周囲の環境と無関係に発生するわけではなく、環境との相互作用によって決定される。このように行動と環境の相互依存性に着目した見方は、主に環境心理学などの分野で議論されており、特定の時間・空間的境界内における環境と行動を合わせた全体的な場面単位は、行動場面 (behaviour settings) という概念で捉えることができる (Barker 1968)。これは、行動の個人差よりも特定の場所や状況における行動の共通性に着目した概念であり (郭・南 2008)、ある特定の行動場面は誰しも共通の行動を起こさせる力をもつという見方をする (石井ほか 1994)。観光空間と観光行動の関係においても、行動場面の考え方は有効だと考えられる。定番の観光ルートに沿って、訪れた観光空間で大勢の観光者が同じような行動パターンをとることは、よく見られる光景であろう。これは、旅程の一場面あるいは旅程全体で満足感を得られる行動が、多くの観光者に共通するためであり、また、そうした行動パターンは観光空間ないし観光ルートの特性によって誘発されると言える。

国立公園などの管理された自然観光地では、異種類の行動をとる利用者同士の軋轢回避や安全対策などを考慮し、一つの空間が多様な観光行動を想定した場として設計されることが少なく、特定の空間で大多数の観光者が共通した行動パターンをとる確率が潜在的に高い。したがって、先行研究で体験評価の対象とされてきた自然景観ではなく、より複合的な行動場면을体

験評価の対象としても、調査参加者の全員が指定された行動場面の中で共通した行動や環境を想起して体験評価を行う見込みは十分にあり、個々人によって評価対象の枠組みが大きくずれるといった問題は少ないと考えられる。特に、本研究で対象とするハイキングは歩道での歩行が主体であるという特性上、非常に限定された行動場面が想定され、参加者にとって評価がしやすいと考えられる。

1.3 観光体験のシーケンス

観光行動を特定の観光空間内というマイクロな環境で捉えれば、移動に伴う景観の移り変わりによって観光者の鑑賞意識レベルは変動する (橋本 1997; 奥・深町 2003; 杉本 2012; Sugimoto 2013)。また、週単位の旅程といったマクロスケールにおいても、日ごとの目的地の選択が観光者の場所に対する評価に影響し、結果として旅程全体で感情変化の波を形づくる (Markwell 1997)。それは、本研究で対象とする日帰りハイキングのような、メソスケールでの観光行動でも同様だと考えられる。ハイキング旅行をいくつかの行動場面に区切ったとき、いくつかの行動場面の連続によって、観光者の感情が様々に変化する。

橋本 (1997) は、観光者の旅行中の感情変化に着目した観光回遊コースの設計手法として、感動曲線 (カタルシスカーブ) の援用を提案している。感動曲線とは、導入 (introduction)、上昇 (rise)、頂点 (climax)、下降 (return)、終結 (catastrophe) からなる感動の描く曲線であり、舞台等の作品をより効果的に演出し、観客に強く印象づけるための技法として時間芸術で広く用いられている。橋本 (1997) は、実際の定番の観光ルートの事例を、感動曲線の組み合わせに当てはめて分析することで、観光資源や観光対象の配置計画に利用できる様々なパターンを整理している。また、奥 (2005) は林内トレイルにおける利用者の景観認識に関する一連の研究のなかで、観光者の行動と満足度との動的な関係を考慮した効果的な景観計画の手法として、感動曲線を援用している。しかし、観光行動における感情変化は、単一の感情だけで説明しきれものではなく、様々な感情が影響する (Chhetri et al. 2004) のだが、その点については言及していない。

自然観光地における観光者の感情変化に関する実証研究は、Hull et al. (1992)、奥・深町 (2001)、相澤・橋本 (2014) のものがある。前2つの研究では、観光者の景観に対する印象評価から取得したデータを基に、満足感を目的変数、その他の感情を説明変数とした回

帰モデルを構築し、満足感の変動に寄与する感情を抽出した。しかし、Chhetri et al. (2004) と同様に自然景観を体験評価の刺激媒体として用いたため、人文資源やその他の環境要素、また自身の行動を含めた複合的な場面に対する評価が困難である。また、評価に使用した感情の種類が少なく、満足感の変動要因や現実空間での感情変化を説明するのにやや不十分な点がみられた。相澤・橋本 (2014) は、自然散策路での散策過程における感情変化を、自然から受ける心理的効果と観光者の性格特性による差異から検討し、感情変化に関するいくつかのパターンを抽出している。例えば、森林散策プロセスではポジティブ感情の増進とネガティブ感情の緩和が同時並行的にみられること、目的地への到達によって高揚感が高まること、集中・緊張の低下つまりリラックスが増進することなどが明らかにされた。しかし、全行程約3kmという短い区間での実験的調査であり、対象とした散策路の距離による影響が十分に検討されたとは言い難く、知見の一般化にはさらなる事例研究の蓄積が必要だと考えられる。

1.4 研究の目的

以上をふまえて、本研究では自然観光地を訪れる観光者のハイキング旅行に着目し、旅程全体をいくつかの行動場面の配列としてとらえ、ハイキング利用者の感情の変化の特徴を把握することを試みる。先行研究と異なる新しい視点は、行動場面単位による人文・自然要素の複合した環境における感情状態を測定することにあるため、その有効性についても検討する。

II. 研究方法

2.1 調査日と調査対象地

調査日は2011年5月3日のゴールデンウィーク期間の中の一日で、調査地は秩父奥多摩甲斐国立公園の御岳山、日の出山、つるつる温泉を順に巡るコースである(図1, 図2)。このコースは観光案内のパンフレットや自治体のWebページ(<http://www.town.hinode.tokyo.jp/0000000425.html> 2016年12月26日確認)にも掲載されており、日帰りハイキングに利用されている。JR 青梅線御嶽駅から下りて公園の入り口まで移動する。日本のハイキング旅行の特徴として、旅程の終盤で温泉を利用することが珍しくない。実際、旅行会社が企画したハイキングツアーには、温泉入浴がスケジュールに組み込まれていることが多い。例えば、クラブツーリズム関東版のWebページにある日帰り登山ツアーの特集(<http://www.club-t.com/theme/sports/aruku>

/oneday-mountain/index.htm 2014年6月1日確認)をみると、2014年6月1日現在に掲載されている7つのツアーの全てに、温泉入浴が予定されている。また、トラベルロードの尾瀬ハイキングツアー専用のWebページ(<http://www.travelroad.co.jp/005/oze/> 2012年12月5日確認)をみても、多くのツアーに温泉施設での入浴が旅程終盤に含まれている。

本研究は実際の観光者の一日の動向を追うドキュメンタリーな調査を行った。調査当日は観光目的で訪れた首都大学東京に所属する大学生グループの14人を対象に、旅行で訪れる空間のうちの7地点で、計7回の質問紙調査を行った。参加者は観光学やそれに関連する学問を専攻する20代の若者であり、男性8人、女性6人の構成である。また、参加者は対象コースへ初訪問である。本調査は終日行われるため参加者の負担が大きく、多くのサンプル数を確保するのが物理的に困難であると予想された。そのため、少数サンプルで実施した。このとき、限定的ではあるが、若者に参加者の属性を統一し、サンプルの質を可能な限り均質

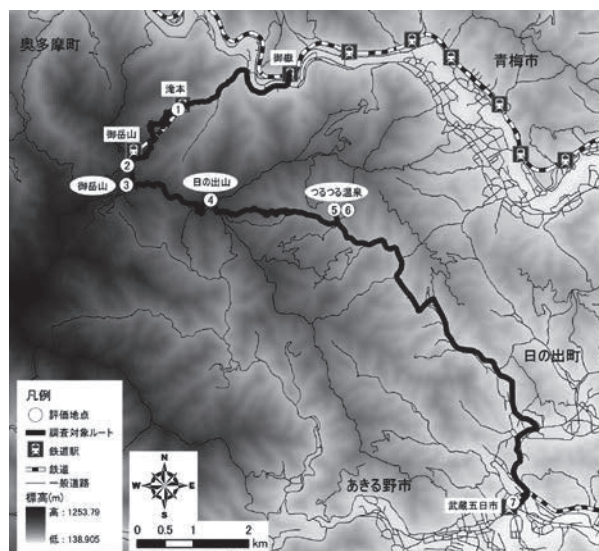


図1 調査対象ルート

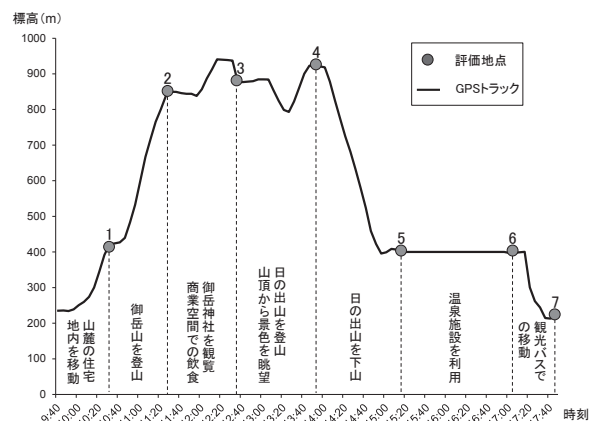


図2 調査対象とした日帰りハイキング旅行の行程

化させることで、分析結果の信頼性を高めるような処置をとった。当日の最初の集合時まで調査のことは伝えず、集合してから初めて調査内容の説明をし、協力を要請した。そのため、参加者は調査のために訪れたのではなく、純粹にハイキングを楽しむために訪れた観光者である。旅行全体にかかった時間は午前9時40分から午後17時40分までの約8時間である。当日の天気は曇りで、降水はなく、風は穏やかであった。また、最高気温は約17℃前後で、旅行中の気温は14℃以上を記録していた。評価区画は環境特性が類似するひとまとまりの空間とし、現地では参加者の様子をみながら評価地点の時間間隔が30分以上2時間以内の範囲で平均1時間程度に収まるよう調整した。そして、行動の統制についてであるが、参加者は昼食時に利用した店舗以外では、ほぼ同じ場所で同じ活動をしていた。なお、旅行全体を評価の対象とするのであれば、本来は自宅から集合地点までの感情の状態も調べる必要があるが、参加者の体験する行動場面が共通してないため、調査対象としなかった。

2.2 アンケート調査の方法

質問紙は大きく選択式評価と自由記述との二部から構成される。まず7つの評価地点において、前回の評価地点から現在の評価地点間の行動場面において体験した行動や環境を総合的に評価してもらった(図3)⁽³⁾。感情測定のための尺度には、Chhetri et al.

(2004)の研究で使用された15の感情を基本として、部分的に修正・追加したものを使用した。具体的には、(1) 魅了、(2) 退屈、(3) 挑戦、(4) 混雑、

(5) 楽しい、(6) 興奮、(7) 期待、(8) 失望、(9) 疲労、(10) 孤独、(11) やる気、(12) 喜び、(13) 安らぎ、(14) 憂うつ、(15) 緊張、(16) 驚き、(17) 興味の計17種類である。現地での評価時には、各感情の同意度を5段階で評価してもらった。そして、上述した心理測定の補助的な質問として、評価対象とする行動場面において、印象に残ったことを自由に記述してもらった⁽⁴⁾。

尺度となる感情の部分修正・追加の理由を下記に示す。Chhetri et al. (2004) は自然景観を観光体験の評価対象としたため、刺激的 (stimulating)、閉鎖的 (enclosing) といった視対象の外観に対する評価を表す要素があったが、本研究では行動場面を評価対象としており特定の位置から限定的に見える景観だけを評価対象としているわけではないため、それらを除外した。そして、新しく追加した感情は疲労、興味、驚き

である。疲労感は、一般的に運動中であれば時間経過に伴って蓄積されるものであり、現時点での疲労感の度合いが、観光者の周辺環境への意識や行動選択の判断に影響を与える。そのため、疲労感の変動が他の感情の変動を理解する上で重要となる可能性がある。Hull et al. (1992) も、ハイキング過程の疲労感が満足感へもたらす影響について言及している。また、森林浴の効果測定で使用されるPOMS (profile of mood states) にも、疲労感が評価項目の1つとして含まれている。興味は、旅程中の関心の度合いの変化を把握するために追加した。いくつかの先行研究で、旅程が進むにつれて変化する慣れ、つまり興味の度合いが、周辺環境への意識レベルを変化させることが報告されている (Hull et al. 1992; 奥・深町 2003; Sugimoto 2012)。驚きは、Chhetri et al. (2004) での研究で使用された感情から除外した「刺激的」の代替要素として追加した。驚きの方が、行動場面のような自身の行動を含めた複合的な対象を評価しやすいと考えたためである。なお、満足感は観光体験における数種の感情の生起や変化が導く認識の過程としてとらえられ (Crompton and Love 1995)、多次元的な性質をもち、一次元的な指標で計測されないという Chhetri et al. (2004) の主張に基づき、測定する感情に含めなかった。

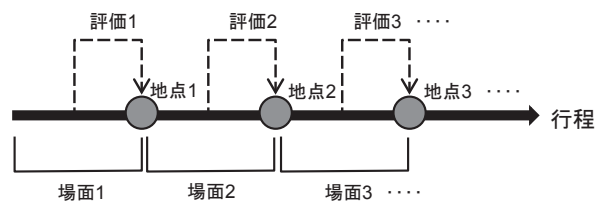


図3 評価手法の概要

2.3 データ行列の作成

本研究では、測定した各感情の平均値×評価地点からなる17×7行列を基本データとして作成した。このデータ行列を多変量解析によって分析し、各感情の動的特徴を把握する。順序尺度は通常だと最頻値や中央値が目安とされるが、心理分析では間隔尺度のように扱って分析することがあるため、本研究でもそのようなスタイルをとる。

なお、個々の参加者の測定値ではなく、各行動場面での平均値をデータとして用いる理由は、本研究では少数サンプルであるために参加者個人よりもグループの総意として行動場面がどう評価されたかを論じる方が適切だと考えたこと、あくまで変動の特性から感情間の類似性を探るのが狙いであるために個々人の評価

値のバラつきの影響をできるだけ小さくする必要があったことにある。

Ⅲ. 分析結果

3.1 各行動場面の感情状態

7箇所ある行動場面での感情状態の特徴をみる。表1に各行動場面で測定された感情のうち、上位5つを示した。特に点数が高い感情は、その行動場面の体験において支配的な感情であったとみなすことができる。次段落より、各行動場面の特徴を、出現数の高かった自由記述の回答パターンなどをふまえて説明していく。

評価地点1では、御嶽駅から御岳山山道への入り口である瀧本駅までの行動場面を評価してもらった。舗装道路や民家が並ぶ準都市的土地利用であり、当日は車の往来が多かった。「坂がきつい」、「のぼりがつらい」などの坂道を進むことへの不満に関する回答が特に多かった(11件の回答中5件)ように、山道入り口までに比較的急な傾斜である道路を歩いたため疲労感が最も高く表れた。しかし、期待や挑戦など旅程初期らしい感情も上位に表れている。

評価地点2では、瀧本駅から山道を通り、御岳山山頂の集落入り口まで進む行動場面を評価してもらった。このエリアは図2の標高値からもわかるように傾斜の大きい林内トレイルを1時間程度歩いたため、疲労感はずっと高い。しかし一方で、楽しい、期待、やる気、魅了などポジティブな感情が上位にきている。自由記述では、「道が険しい」といった坂道に対するネガティブな印象(13件の回答中6件)や、「杉が多い」など林内の様子(13件の回答中3件)への回答が多かったが、「だんだん楽しくなってきた」というポジティブな回答も1件のみではあるが存在する。

評価地点3で評価してもらった行動場面は、御岳山山頂集落での休憩・食事・観覧である。ここは御嶽神社や飲食店などの人工的な観光資源があり、観光者の多くが立ち寄る場所である。そのため、混雑感が高まったが、同時に楽しい、魅了、期待、喜びのポジティブな感情の測定値も高い⁵⁾。自由回答では、神社での活動(12件の回答中2件)や、昼食のメニューや「みんなでお昼を食べた」という活動(12件の回答中5件)を印象的と捉えており、これらがポジティブ感情(特に、楽しいの感情)を高めたと考えられる。

評価地点4では、御岳山の山頂集落出口から日の出山の山頂までの行動場面の評価である。魅了、興奮、楽しい、喜びのポジティブな感情が上位に並び、さらにどれも測定値平均が3.5を超えている。日の出山の山

頂は見晴らしの良い景観を眺められる眺望スポットのため、これらの感情が高かったのであろう。実際に大部分の参加者が、「頂上の景色」、「登頂の達成感と景色のキレイさ」のように日の出山山頂から見える景色を評価していた(14件の回答中10件)。

評価地点5では、日の出山山頂から下山し、つるつる温泉という温泉施設に至るまでの行動場面を評価し

表1 各評価区画における上位5位の感情

評価区画	順位	感情	平均値	標準偏差
1	1	疲労	3.43	1.16
	2	楽しい	3.14	1.03
	3	期待	3.14	1.1
	4	挑戦	3	1.18
	5	混雑	3	1.41
2	1	楽しい	3.64	0.93
	2	疲労	3.43	1.16
	3	期待	3.36	1.01
	4	やる気	3.36	1.01
	5	魅了	3.29	0.91
3	1	楽しい	3.79	0.8
	2	魅了	3.36	0.93
	3	混雑	3.29	1.27
	4	期待	3.29	0.99
	5	喜び	3.21	0.97
4	1	魅了	4.07	0.73
	2	興奮	3.86	0.95
	3	楽しい	3.71	0.91
	4	疲労	3.57	1.09
	5	喜び	3.57	0.94
5	1	疲労	4	1.04
	2	混雑	3.5	1.65
	3	期待	3.29	1.14
	4	魅了	3.14	0.95
	5	楽しい	3.14	1.17
6	1	混雑	3.93	1.27
	2	安らぎ	3.93	0.73
	3	魅了	3.79	1.05
	4	楽しい	3.79	0.97
	5	喜び	3.43	0.94
7	1	疲労	3.21	1.19
	2	安らぎ	3.14	1.17
	3	混雑	3.07	1.49
	4	楽しい	2.86	1.23
	5	喜び	2.64	1.01

てもらった。疲労感が特に高いが、これまでに蓄積された疲労が表面化している様子がわかる。また、魅了などポジティブな感情は、場面4と比べて大幅に低下した。これは、「下りの山道がきつかった」という回答にみられるように、下山に使用した山道に対するネガティブな印象(12件の回答中4件)が主な要因だろう。図2の標高値が示す通り、傾斜の大きい坂を下った。

評価地点6では、温泉施設での行動場面を評価してもらった。当日はゴールデンウィーク期間中ということもあって、多くの観光者に利用されていたため、混雑感の値が高い。自由記述でも温泉の混雑する様子を印象的と回答する人がいた(13件の回答中3件)。しかし、温泉利用のため安らぎの評価値も高い。また、魅了、楽しい、喜びなどポジティブな感情が多く上位にあり、どれも平均値が高い。実際、自由回答では多くの参加者が「温泉が気持ちよかった」など温泉の入浴体験に対してポジティブな回答をしていた(13件の回答中6件)。

評価地点7では、温泉施設から施設専用のバスに乗って五日市駅まで戻る行動場面を評価してもらった。疲労感が最も高いが、安らぎも高い。これは、今まで蓄積された疲労と、温泉の利用による身体の癒しという2つの側面が考えられる。また、楽しい、喜びなどのポジティブな感情は、この地点における感情の中では測定値が比較的高いが、値自体は3以下で旅程全体からみれば低い。自由記述は10件の回答中、3件がバスの混雑に対するネガティブな印象であり、明確にポジティブと判断できる意見は1件だけであった。

3.2 変動パターンからみた感情の類型化

感情を類型化する手法として、本研究では階層的クラスタ分析を使用する。解析にはRの統計パッケージstatの分析関数hclustを使用した。個体間距離の設定にはベクトル変数*i*と*j*のピアソンの積率相関係数行列 r_{ij} を、以下のような計算式で非類似度を示す距離行列 d_{ij} に変換したものを使用した。

$$d_{ij} = 2(1 - r_{ij}) \quad (0 \leq d_{ij} \leq 4)$$

これにより、感情間の共変動を基にしたクラスタリングが可能となり、変動パターンが類似した感情がクラスタ化される。クラスタ間距離の設定方法には、最遠隣法を用いた。図4が得られたデンドログラム(樹形図)である。ここで、樹形図の高さ2を基準に区切り、4つのクラスタに分類した。各クラスタ別に各感情の平均値の推移をみていく(図5)。

クラスタ1(魅了、楽しい、喜び、興奮)は主に双

峰型の山のような変化曲線を描いている。旅程初期から徐々に上昇し、楽しいは御岳山山頂の集落で、魅了、喜び、興奮は日の出山の山頂到達時にピークに達するが、下山時に3つとも一次的に下降する。しかし、温泉施設の利用で再び上昇し、バスに乗り五日市駅に到達する間に大幅に下降した。クラスタ1は、観光者の観光体験や観光対象に対する評価を直接的に反映した感情であり、感動の度合いを表していると考えられる。

クラスタ2(期待、挑戦、やる気、驚き、興味)では、旅程全体的にみて、最初の値の高い状態からなだらかに下降していく傾向にある。特に、期待や興味は旅程終盤まで変化が小さい。一方で、挑戦とやる気は、場面2や場面4の登山で上昇し、御岳山山頂集落での食事・休憩や温泉施設の利用で再び下降するというように、変化が大きく安定していない。しかし、期待や興味と同様に、旅程全体を通して下降する傾向にある。つまり、旅程が進むにつれて、いくつものメニューを消費し、一定の充足感を得たことで、観光体験自体に対する関心が低下したのだと考えられる。

クラスタ3(退屈、失望、孤独、憂鬱、疲労、緊張)では、疲労以外の感情は旅程の最初から最後まで値が低く、なだらかに起伏少なく変動している。退屈、失望、孤独、憂鬱、緊張は、他のクラスタの感情に比べても、旅程全体で値が低い状態が続いている。しかし、日の出山の下山時において値が上昇していた。疲労は、登山や下山など激しい運動を体験すると値は上昇するが、休憩時間をはさんだ行動場面では下降するという、分かりやすい変動パターンであった。さらに、疲労はクラスタ3の他の感情よりも測定値が抜きん出て高いが、興味深いことに、変動パターンは類似している。

クラスタ4(安らぎ、混雑)は、他のクラスタと比べて不規則的に変動しており、2つの要素を比べ

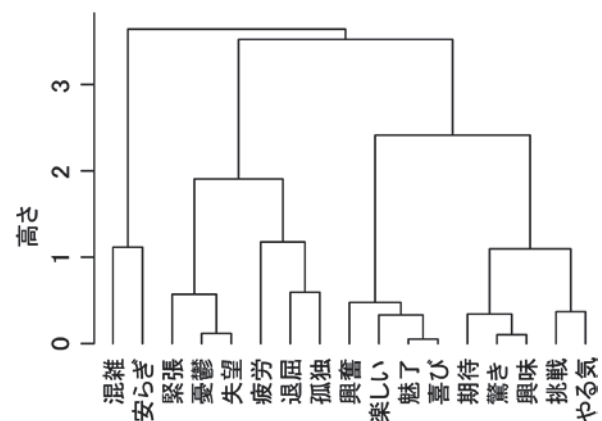


図4 デンドログラム(樹形図)

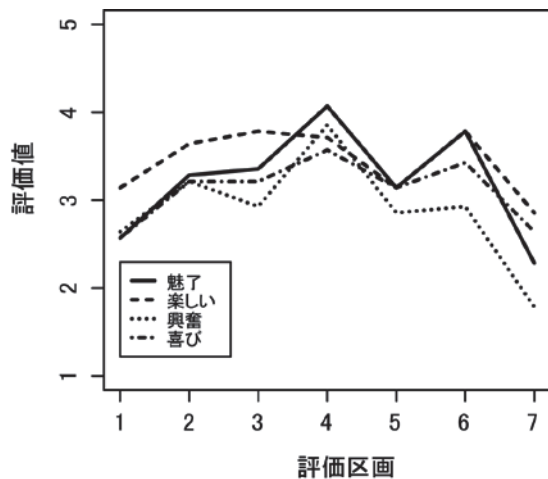
ても関連性が読み取りづらい。しかし、2 つとも温泉利用後に最大値を記録したことは共通していた。混雑感、場面3の御岳山山頂集落での体験や場面6の温泉利用後で上昇するが、場面2と場面4の林内での登山後に下降していた。前者は、寺社、飲食店、温泉など人工的に構築された環境であり、当日は利用者が多く混雑していたが、休息や食事をしていたため、安らぎは低下せず上昇しているのであろう。また、後者の登山では、混雑感は下降したが、安らぎは前者同様に上昇している。これは、森林の中の登山道にいたため、周辺に人が少なかったこと、森林浴をして癒されたことが要因であろう。

このように、ハイキング時における感情の動きは同様ではなく、それぞれに特徴的な変動パターンをとる。

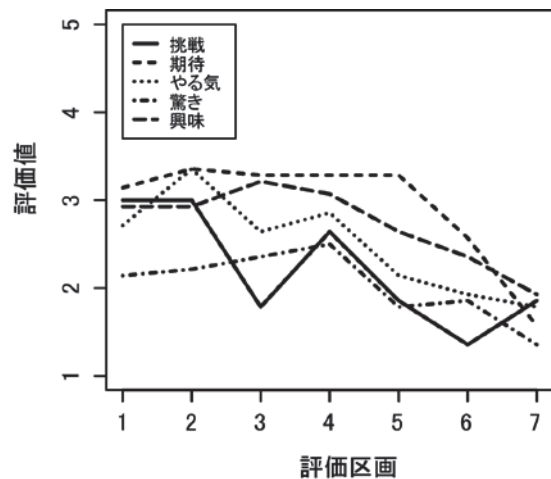
IV. 考察

さて、本章では本研究の重要な着目点である観光心理の動的特徴について、ポジティブとネガティブな感情で代表的なものの変動パターンをとりあげ、それらの一般性の程度を先行研究との比較により検討する。さらに、先行研究にはない、新たに得られた知見をまとめ、それらの応用可能性について考察する。

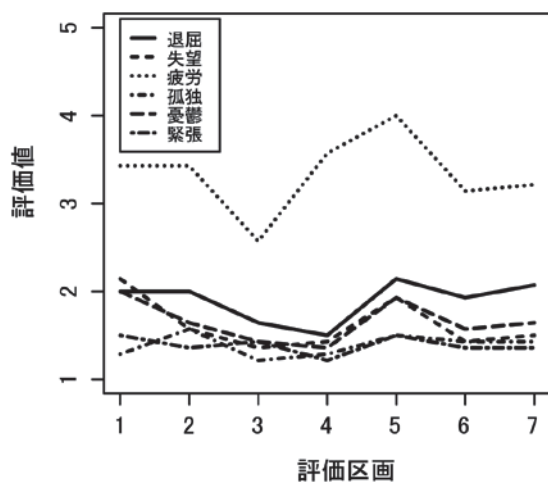
IV章までの分析結果をまとめると、本研究における日帰りハイキング旅行における各感情の変動パターンの特徴は以下ようになった。クラスター1にみられるような、ポジティブかつ行動場面への評価を直接反映した感情は、登山によって徐々に上昇し、眺望景観のような見所となる観光対象や登山自体の達成によって頂点に達し、下山によって徐々に下降した。やる気



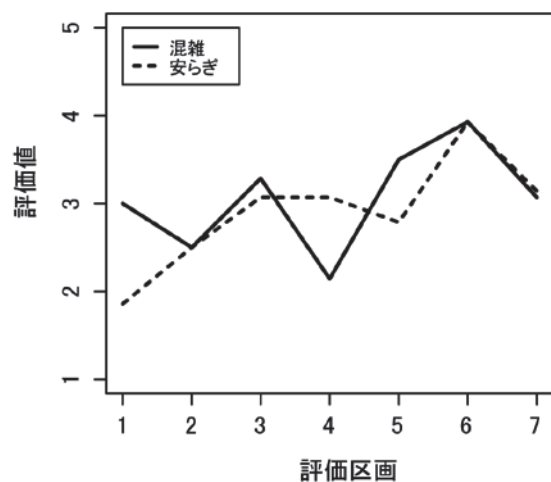
(1) クラスター1



(2) クラスター2



(3) クラスター3



(4) クラスター4

図5 クラスター別の感情の時系列変化

や期待のようにクラスター2に属し、観光者自身で内発するような感情は、旅程初期から見所となる観光対象に出会うまで持続するが、その後は関心が薄れ下降した。クラスター3のネガティブな感情は、観光行動中には目立たないが、疲労の蓄積にともない、旅程終盤で表面化した。疲労感は、同じクラスター3に属する他の感情と変動パターンは似ているものの、それよりも計測値が大幅に高かった。疲労感は徐々に蓄積されるものと考えられるが、現時点での身体活動の激しさにも影響を受けていた。最後に、クラスター4の安らぎや混雑感など周辺環境の状態に影響される感情は、その性質の通り、場所の環境特性によって不規則に変動した。ただし、表1からわかるように混雑感の評価値に関しては標準偏差つまりバラつきが比較的大きいため、個人によって混雑への感じ方が異なる傾向にあることに注意しなければいけない。

先行研究ではポジティブな感情として、特に満足度や感興度の変動パターンに着目してきたが、それと大きく関連すると考えられるのがクラスター1の感情である。クラスター1に属する感情の動きは、魅力度の高い観光対象でピークを向かえ、その後は時間・空間の変化とともに下降するという性質をもち、橋本(1997)の提示した感興度曲線の性質とよく似ている。また、観光者の写真撮影枚数の時空間的集積傾向から観光者の関心レベルの変化を探った Sugimoto (2013) や Markwell (1997) の研究でも、これらと類似した変動パターンの存在を報告している。したがって、クラスター1の感情変化は、観光者の感動度合いの変化を反映していると言える。また同時に、消費者行動研究における覚醒 (arousal) の度合いを表しているとも考えられ⁶⁾、クラスター1にみられるポジティブ感情の評価値が高い行動場面ほど観光者にとって刺激水準が高く、高覚醒状態を形成させる働きがあったのであろう。感情変化からみた2つの頂点である日の出山山頂への到達と温泉施設利用の場面では、自由記述をみても景観眺望や温泉入浴などの場面をポジティブなものとして評価した回答が多かった。逆に、それ以外の場面では、坂道や混雑に対するネガティブな感想を述べる、あるいは単に印象に残った環境要素や事実を単に記入するだけのものが多かった。したがって、参加者のポジティブ感情は基本的に自身の行動や環境の特性に紐づけられたものであるが、特に際立って良好かつ刺激水準の高い体験をした場合に、その場面が突出して高く評価され、結果として頂点の存在が明快な感情変化のパターンを形成したのだと考えられる。

次に、ネガティブな感情の変動パターンについて、議論したい。Hull et al. (1992) は、ハイキングにおける山道の上りと下りでの感情変化の特徴を比較し、上りの場合には退屈や疲労感などのネガティブな感情が満足感の変動に対し負の回帰係数として寄与するが、下りの場合には寄与しないことを示した。さらに、下りは上りよりも、景観美などの環境要素に対する評価が、満足感に対して大きな正の回帰係数として寄与することを示した。本研究ではハイキングの下山でネガティブな感情が表面化したため、Hull et al. (1992) の導いた結果とは異なる。また、相澤・橋本 (2014) の研究結果では、自然散策の効果としてポジティブ感情の増進とネガティブ感情の緩和がみられることを発見したが、本研究の結果でも評価区画の1から4の間にその現象がみられた。図5の(1)と(2)をみれば、旅程が進むにつれてクラスター1のポジティブ感情が上昇し、クラスター3のネガティブ感情が下降傾向にあることがわかる。しかし、評価区画5以降ではネガティブ感情が高まる結果となり、その現象は持続しなかった。このように、本研究は2つの先行研究と異なる結果を示したが、その理由として、旅程の時間や距離の違い、コース設定の違い、山の形状の違いなどの環境要素が影響したことが考えられる。本研究の調査のように長時間の旅程だと、下山時にはかなりの疲労が蓄積されていると推察される。登山時には景観スポットである山頂を目指して挑戦や期待の感情が働くために、ネガティブな感情は表面化しにくい。登頂を達成した後での関心低下によって下山が義務的になり、その際のストレスがネガティブな感情を表面化させた可能性がある。また、下山に利用したトレイルは急斜面が多く、歩行の困難さもネガティブな感情の値を高める要因となったのであろう。

上記の議論からわかる通り、本研究は探索的であり、あくまで事例調査の域を超えるものではない。ハイキング旅行における観光心理の一般化には、より多くの研究の蓄積が必要である。しかし、そういった課題を含みながらも、本研究では2つの重要な知見が得られた。第一に、行動場面ごとに支配的な感情は様々であるという点である。例えば、場面4と場面6は、クラスター1の感動を示す曲線において2つの頂点と言えるが、それぞれで体験の内容や環境の特性が異なるため、支配的な感情の特徴も異なる。例えば、感動の1次頂点である場面4の日の出山の登山と山頂への到着時では、表1より魅了、興奮、楽しいなどの順に支配的であるが、感動の2次頂点といえる場面6の温泉施

設の利用では混雑, 安らぎ, 魅了の順に支配的である。つまり, 感動の度合いが計測上同じような値であったとしても, 行動場面の特性によって観光者の感情の状態は様々である。第二に, 感情間の相互的影響である。例えば, 場面5の日の出山の下山では, クラスタ1のポジティブな感情の下降と, クラスタ3のネガティブな感情の上昇が同時にみられたことから, 一方が上がることで他方が下がるといった動きをしていたことがわかる。逆に, クラスタリングされた感情同士の動きが似ていたことから, 正の相関関係のような変動パターンも存在する。このように, 各感情はそれぞれ独立して変動するのではなく, 相互に影響し合う関係にあると考えられる。

橋本(1997)や奥(2005)は, 感興度曲線を援用し, シークエンスの観点から観光ツアーや観光空間の効果的な計画手法を理論化した。しかし, 現実の観光者の心理は多様な要素をもち, それらの変化には行動場面の特性だけでなく, 感情間の相互的影響も関係することが示唆された。本研究では日帰りハイキング旅行を事例としたが, このことはあらゆる観光行動の場面にも当てはまると考えられる。実際の観光地の計画・管理に応用するならば, 感興度曲線のように観光者にとって望ましい感動の波が形成されるような観光ルートを目指すと共に, ポジティブ感情だけでなく他種類の感情の変動を考慮することで, より洗練された観光ルート計画に役立てることが考えられる。例えば, 旅程のどの場面でネガティブ感情が表面化しやすいかを, 環境特性やシークエンスによる感情変化の観点から予測し, それを最小限に抑えるような対処策をとるといったことである。本研究のような自然観光地でのハイキング旅行での行動場面で応用すれば, コース上で退屈の値が比較的高い箇所に展望施設や自然観察看板を配置する, 利用者にとって好ましくない下山時の歩道の急斜面を歩道整備によって改善する, といった貢献が可能であろう。

V. おわりに

本研究では, 自然観光地における代表的な観光行動であるハイキングをとりあげ, 秩父甲斐奥多摩国立公園の御岳山-日の出山のコースを事例に, 一日をスケールとしたハイキング旅行における観光者の感情変化の特徴を把握しようと試みた。その結果, 行動場面ごとの支配的な感情の構成や, 感情分類別の変動パターンの特徴を明らかにした。これらの結果から, 行動場面ごとに支配的な感情は様々に異なること, 各種の感情

は独立したまま変動するのではなく相互に影響し合うことが示唆された。ただし, 本研究で分析したのは, 変化の相対的な類似性に基ついた感情分類であり, 感情間の相互影響を統計的に検証できたわけではない。これについては, 今後詳細に分析していく必要がある。

調査設計上の課題としては, 本研究で行った調査が学生のみを対象としたこと, 季節性の影響を考慮していないこと, 調査手法の特性上サンプル数が少なかったことが挙げられる。しかし, 本研究は先行研究との比較において, シークエンスという視点から新たな知見を提供できた。また, 行動場面単位での感情変化の測定の有効性を示すことができた。将来的に海外との比較研究が進めば, 日本のハイキングコースの長所や短所が分かり, 独自のアピールポイントの創出や, 観光地の管理・サービスの改善にも役立つ。本研究の分析結果に則すと, 旅程終盤での温泉利用は, ハイキング利用者の心理的充足に大きく寄与する活動であることが示されたため, 温泉利用を含んだハイキングコースを外国人に対しても積極的に紹介してみることが挙げられる。このように, 観光者の目線にたった行動科学的研究を積み重ねていくことで, より良い観光空間を演出するための実践的知見が提供できる。

先行研究では, 「人間—環境」の相互作用という視点から, 観光者の観光行動時における環境への反応や評価の特性を分析し, 得られた知見を自然観光地における空間魅力度を推定するためのモデリングに活用するといった試みも行われている(Chhetri et al. 2008)。これにより, 観光地の合理的な空間計画への貢献が期待されている。今後は, こうした応用研究へ知見提供をするための, 具体的な方法や問題点について議論していく必要があろう。

補注

(1) 「ハイキング(hiking)」の定義であるが, Longman Dictionaryでは「山や農村地帯などの自然環境を長い時間かけて歩く行為(the activity of taking long walks in the mountains or country)」と定義している(<http://www.ldoceonline.com/dictionary/hiking> 2014年6月2日確認)。本研究ではこれに習い, 「自然環境での歩行を主体とした観光行動」をハイキングとし, ハイキングを含む旅程全体を「ハイキング旅行」とする。ハイキングと似た「登山(英語でclimbingの場合)」は, 「山や岩場を登るスポーツ(the sport of climbing mountains or rocks)」と定義され(<http://www.ldoceonline.com/dictionary/climbing> 2014年6月2日確認), 一定レベルの運動技術が必要であり, 難易度が

ハイキングよりも高い。しかし、日本語の「登山」では、行為の難易度に関係なく山を登る行為は全て「登山」と表現できる。ハイキングでは、傾斜が比較的緩い山を整備された歩道を通って登る場合もあり、難易度の低い「登山」を旅程に含むこともある。本研究では行為の難易度に関係なく、単に山を登る行為を「登山」とし、ハイキングの部分的行動として捉える。つまり、ハイキング旅行の中でも山を登る行為を伴う場面での行動を「登山」と表記する。同様に、その他の部分的行動が主体となる場面では、それぞれ独自の名称で表現することとする。

- (2)感情 (feeling) は情動 (emotion) と気分 (mood) を包摂する最も広範な概念である。情動とは一時的で激しい心的状態であり、気分とは比較的穏やかで持続時間の長い心的状態である。
- (3) 具体的には、質問紙上で「(1)現在のあなたの心理状態を以下に示す項目ごとに点数づけしてください。」という文言で指示した。また、評価の視点については、調査説明時に「1つ前に行ったアンケートから現時点で行うアンケートの間に経験した行動と環境をふまえて、自身の現在の心理状態を評価してください」と伝えた。
- (4) 具体的には、質問紙上で「(2)前回のアンケート時から現時点までで、印象的だった出来事は何ですか？(1)での回答をふまえてお答えください。」という文言で指示した。
- (5)自然観光地において、混雑感は必ずしも利用者の満足感を直接低下させる要因とならないことが、先行研究でも報告されている(山本ほか 2004; 一場 2007)。
- (6)消費者行動研究における覚醒の定義や感情との関係については、石淵 (2013) の論文で詳しくまとめられている。

謝辞

調査へ協力していただいた参加者の方々に、感謝の意を記します。本稿の作成は、科学研究費補助金の日本学術振興会特別研究員奨励費(課題名:「体験論パラダイムに基づく景観評価と景観資源の適正配置モデル」、代表者:杉本興運、課題番号:23-6606)の助成の一部を受けて行われた。

参考文献

- 相澤孝文・橋本俊哉 2014. 自然散策が及ぼす心理的・生理的効果の性格特性による比較—「東京都檜原都民の森」における調査結果より—。立教大学観光学部紀要 16: 99-114.
- 石井真治・井上 弥・神山貴弥 1994. 行動の許容度に及ぼす環境セッティングの効果—喫煙行動を中心にして—, 広島大学学校教育学部紀要 16: 153-158.
- 石淵順也 2013. 消費者行動における覚醒の働き:感情研究に基づく

検討。商学論究 60: 343-373.

- 一場博幸 2007. 尾瀬における利用体験上の収容力に関する調査手法の開発, ランドスケープ研究 71: 269-276.
- 奥 敬一・深町加津枝 2001. 林内トレイルのシークエンス変化に伴う景観体験および満足感評価の変動. ランドスケープ研究 64: 729-734.
- 奥 敬一・深町加津枝 2003. 森林レクリエーション行動下における景観体験の生起パターン. 日林誌 85: 63-69.
- 奥 敬一 2005. 林内トレイルにおける景観体験のモデル化に関する研究. 東京大学農学部演習林報告 113: 45-132.
- 郭 維倫・南 博文 2008. 人々を都市中心部へ引き付ける心理的力に関する研究: 環境心理学的モデルの提案. 九州大学心理学研究 9: 35-47.
- 杉本興運 2012. 観光者の視覚的体験情報に基づく回遊空間の評価: デジタルカメラ, GPS, GIS を活用した分析手法. GIS—理論と応用 20: 39-49.
- 橋本俊哉 1997. 「観光回遊論: 観光行動の社会工学的研究」. 東京:風間書房.
- 山本清龍・齋藤伊久太郎・本郷哲郎・小笠原輝 (2004): 利用者の意識構造分析を通じた富士登山の問題の構造化, ランドスケープ研究 67: 689-692.
- Barker, R. G. 1968. Ecological psychology: Concepts and methods for studying the environment of human behavior. Stanford U.P.
- Bishop, I. D. and Gimblett, H. R. 2000. Management of recreational areas: GIS, autonomous agents, and virtual reality. *Environment and Planning B: Planning and Design* 27: 423–435.
- Chhetri, P., Arrowsmith, C. and Jackson, M. 2004. Determining hiking experiences in nature based tourist destinations. *Tourism Management* 25: 31-43.
- Chhetri, P. and Arrowsmith, C. 2008. GIS-based modelling of recreational potential of nature-based tourist destinations. *Tourism Geographies* 10: 233-257.
- Chhetri, P., Corcoran, J. and Arrowsmith, C. 2010. Investigating the temporal dynamics of tourist movement: an application of circular statistics. *Tourism Analysis* 15: 71-88.
- Crompton, J. L. and Love, L. L. 1995. The predictive validity of alternative approaches to evaluating quality of a festival. *Journal of Travel Research* 34: 11-24.
- Dorwart, C. E. and Moore, R. L. 2009. Visitors' perceptions of a trail environment and effects on experiences: a model for nature-based recreation experiences. *Leisure Sciences* 32: 33-54.
- Hull, R. B., Stewart, W. P. and Yi, Y. K. 1992. Experience patterns: capturing the dynamic nature of a recreation experience. *Journal of Leisure Research* 24: 240-252.
- Hull, R. B. and Stewart, W. P. 1995. The landscape

encountered and experienced while hiking. *Environment and Behavior* 27: 404-426.

Markwell, K. M. 1997. Dimensions of photography in a nature based tour. *Annals of Tourism Research* 24: 131-155.

Oku, H. and Fukamachi, K. 2006. The differences in scenic perception of forest visitors through their attributes and recreational activity. *Landscape and Urban Planning* 75: 34-42.

Schwartz, Z., Stewart, W. and Backlund, E. A. 2009. Monitoring visitor flows in destinations: the case of multiple-use hiking trails in Grand Canyon National Park. *Tourism Analysis* 14: 749-763.

Sugimoto, K. 2013. Quantitative measurement of visitors' reactions to the settings in urban parks: spatial and temporal analysis of photographs. *Landscape and Urban Planning* 110: 59-63.

Wolf, I. D., Hagenloh, G., and Croft, D. B. 2011. Visitor monitoring along roads and hiking trails: how to determine usage levels in tourist sites. *Tourism Management* 33: 16-28.

Abstract

This study attempts to explore the patterns of changes on tourists' feelings during a hiking experience in the context of one-day trip. A group of university students evaluated their current feelings via a questionnaire at seven locations along the Mt. Mitake-Hinode walking trail in Chichibu-Tama-Kai National Park in Tokyo, Japan. Hierarchical cluster analysis considering the covariation among emotional factors was applied to extract clusters of similar ones in terms of fluctuation patterns. The results indicated tourists' feelings during a recreational activity were not stable, but unique sequence patterns were formed for each feeling type.

キーワード：観光体験 (Tourist Experience), ハイキング (Hiking), 日帰り旅行 (One-Day Trip), 感情 (Feeling)